

## 大事なものと言ったら 「歯」ですよ ～江戸の歯にまつわる話～

【かわら版】

館藏品・期間限定公開のご案内  
講座のご案内

【企業史展コラム1】

もうひとつの化粧史

—伊勢半グループ製品の今昔—

「艶姿十六女仙」一勇斎国芳 画・神奈川県歯科医師会歯の博物館所蔵  
朝の身支度をする女性。右手に持った房楊枝の先端に  
紅染め歯磨き粉を付け、これから歯を磨くところ。



## 大事なものと言ったら「歯」ですよ～江戸の歯にまつわる話～

**歴史上のあの人も  
歯痛に悩まされました**

江戸幕府第十四代將軍 徳川家茂が、ひどい虫歯だったことは有名だ。家茂の遺骨調査が行われた際、処置されていない多くの虫歯が確認された。將軍でさえ適切な治療が施されていなかった当時の歯科医療とはどのようなものだったのだろうか。

文献上、日本における歯科の初見は養老<sup>※</sup>医疾令の第五条(医生教習条)とされている。本条では醫生を四科の専攻に分けて学ばせることを定め、そのうちのひとつに「耳目口歯」を挙げている。これがのちに分科し、近世に口科または口科となっていく。

日本現存最古とされる医学書『医心方』(丹波康頼撰・九八四年)は、歯やその周辺部にかかる疾患の原因や治療法を述べている。たとえば虫歯によ

る痛みの養生法として、朝夕歯を磨くことや食後に必ず嗽を数回行うこと、その嗽薬の処方などを記す。これでどの程度虫歯の進行を抑制できたのか、あまり期待はできそうにない。

藤原道長の日記『御堂関白記』に歯痛治療の記録が見える。ある日、歯痛に苦しむ中宮のため、内裏に僧が呼ばれた。顔が腫れ上がるような痛みに対し、最善の治療法として採用されたのが加持祈祷だった。鎌倉幕府を開いた源頼朝も、歯痛に悩まされた一人だ。頼朝は京に使いを出し、痛みに効く良薬を求めさせる一方で相模国の日向薬師に平癒祈願をしている。

これらの事例からもわかるように、養老令で「耳目口歯」を設けようとも、肝心の治療技術が依然として未熟なままだった。前近代においては随分と

長い間虫歯の原因は「歯虫」が歯質を食べて歯を壊すからだと考えられており、治療はすなわち歯虫退治であった。江戸時代後期、根岸鎮衛が著した随筆『耳囊』には、当時市井に流布していた口腔疾患療法が記されている。葎の実を燻し、その煙を患部に吹きかければ耳から歯虫が出て行くと

か、冬瓜を糠漬けにして干したものを黒焼きにし、それを一日三回口に含めば虫歯知らずで過ごせるとか、呪文を唱えながら嗽をすれば痛みが消えるとか、およそ今日の医学から見れば荒唐無稽な民間療法ばかりである。当時、口中疾患を扱う

医者を「口中医」と呼んだが、彼らが施す治療は『耳囊』に見るような生薬などの民間療法のほか、拔牙、鍼・灸による治療がせいぜいだった。しかしながら満足な治療の受けられなかつた時代であって、はこれらの療法が扱りの所であり、信ずるに値したのだ。

### しっかりとデンタルケアして真っ白な歯を

虫歯を予防し、健康な歯を維持する手段として真っ先に浮かぶのは歯磨きである。指を使って塩で歯を磨くことは古くから行われてきたが、江戸時代中期以降、歯磨き粉や房楊枝(当時の歯ブラシ)の商品化が著しく進んだ。『色道大鏡』は粋人のマナーとして、歯は透き通るほどに白く磨き尽くすものだという。外見をいくら装っても口中ケアに抜かりがある者は粋人ではないのだ。歯磨きをせず、歯垢の溜まった黄色い歯を「枇杷色の歯」と蔑んだ。とくに白い歯へのこだわりは江戸っ子が強かったように、『嬉遊笑覧』では「歯磨き粉は江戸に優るものはない」と記す。事実、江戸

の土産品として歯磨き粉は名物のひとつとされていた。

当時の歯磨き粉は、房州産(千葉県)の礫砂を原料に香料を加えていた。房州砂(陶土)の主成分は炭酸カルシウムで、これを水に溶かし、上澄みの細かい粒子を沈殿させ、天日干しして泥灰質の粒子にする手法(水干という)で作られた。高級な磨き砂には麝香や白檀、龍腦などで香り付けをし、さらに

紅を加えて色付けをした。「梅見散」「梅紅散」「匂ひ薬歯磨」「丁字屋歯磨」「助六歯磨」「梅勢散」など、文化文政期にはおよそ百種の歯磨き粉があったと言われるほど江戸のデンタルケア市場の需要は高かった。

一方房楊枝は、柳や黒文字、杉、竹などを材料に作られた。『和漢三才図会』によれば、柳には清熱作用があるとし、歯薬にも使われたようだ。楊枝の先端を煮詰め、房状に割り、繊維のささくれを除いてから使用した。房状の部分に歯磨き粉を付けて磨いた後、柄の部分を使って舌苔を取った。

一方房楊枝は、柳や黒文字、杉、竹などを材料に作られた。『和漢三才図会』によれば、柳には清熱作用があるとし、歯薬にも使われたようだ。楊枝の先端を煮詰め、房状に割り、繊維のささくれを除いてから使用した。房状の部分に歯磨き粉を付けて磨いた後、柄の部分を使って舌苔を取った。

一方房楊枝は、柳や黒文字、杉、竹などを材料に作られた。『和漢三才図会』によれば、柳には清熱作用があるとし、歯薬にも使われたようだ。楊枝の先端を煮詰め、房状に割り、繊維のささくれを除いてから使用した。房状の部分に歯磨き粉を付けて磨いた後、柄の部分を使って舌苔を取った。



右手に房楊枝を持ち、左手には紅染め歯磨き粉の入った箱を持つ女性。手前の耳壺には嗽茶碗が見える。「美人花くらべ」国画画・神奈川県歯科医師会歯の博物館所蔵

これを「舌こき」という。口臭ケアに敏感だった江戸っ子は、歯だけでなく舌も徹底して磨いたのである（女性は歯磨きの後、お歯黒を塗った）。

余談になるが、毎食後に歯を磨くという習慣は、実は明治になって西洋の歯科医学が入ってきたから根付いたものだ。

貝原益軒の『養生訓』は、朝起きた時に歯を磨く習慣を説き、文化十年刊の読本『都風俗化粧伝』も同様である。歯磨きは起床後に行い、食後は楊枝で口内の食べかすを取り、湯や茶を口に含んで歯間に挟まったものを吐き捨てるようにと記している。

## あのベストセラー作家、実は「入歯」でした

前々号（Vol.24）で少し触れたが、甘党だった曲亭馬琴はその宿命といえさかやはり虫歯に悩まされるが多かった。馬琴は五十七歳にして総入歯を使い始め、『馬琴日記』を見ると入歯製作の過程を知ることができる。

当時の入歯は木製（木床義歯）で、義歯床の材には黄楊や梅・桜・黒柿などを、人工歯の材には蝨石や象牙・鯨などの動物の骨を用い、これらを鑿の彫刻刀で削って作った。とくに黄楊は、木目が非常に緻密なため割れに

くく、かつ硬く強くて軽い、耐久性に優れた材であることから義歯床の最良の材とされた。黄楊の土台（床部）にはめ込んだ人工歯が抜け落ちないよう、前歯の横に穴を開け、三味線の糸を通して固定した。馬琴の入歯はたびたびこの糸が切れてしまったようので、何度か修理に出し、ついには自ら三味線糸を入歯師に提供している。

入歯師はあくまで入歯作りを業とする職人であって口中医ではない。密蝨に松脂、白蝨、ごま油などを混ぜたものを使って口腔の型取りを行い、荒削りの入歯を口の中に当てながら、当たりの強いところを削り、微調整を加えていった。個々に詠えた入歯は当然ながら高価だ。ちなみに馬琴は、入歯の代金として上下で金一両三分を支払っている。

## 大事なものと言ったら「歯」ですよ

江戸時代の墓跡から副葬品として入歯が出土する事例は少なくない。埋葬者の生前生活において欠かせない大切なものだったことをよく示している。国学者本居宣長は、入歯を作り、ものをよく噛めるようになった喜びを息子宛の書簡で語ったことがある。歯のありがたみをまさしく噛み締めたであろう宣長の姿は、現代人にも共通するところだろう。

六月四日は虫歯の日。日頃歯医者者を敬遠しがちな人も、歯の衛生週間くらいは前向きに関わりを持つてみては？

\*1 養老律令は天平宝字元年（七五七）施行、大宝律令に続いて制定された日本古代の基本法令である。

\*2 歯痛のまじないに関しては、紅ミュージアム通信Vol.21を参照。

\*3 江戸時代は抜歯を行うにあたって麻酔を使用した。現代の表面麻酔剤のように、歯肉周辺に草烏頭（トリカブト）や山椒、細辛などの生薬を塗り、痛覚を麻痺させてから抜いたという。

\*4 女性の入歯は黒柿の木を使い、お歯黒をつけているように前歯を黒くした。



→入歯（入目）（義歯）：入鼻（梅毒で鼻が落ちた人に作った義鼻）をうたった引札。江戸時代末期、日本大学松戸歯学部歯学史資料室所蔵



←木床義歯（上下）：江戸時代末期、神奈川県歯科医師会歯の博物館所蔵

調整を加えていった。個々に詠えた入歯は当然ながら高価だ。ちなみに馬琴は、入歯の代金として上下で金一両三分を支払っている。

## 期間限定公開中!

### 「黒蝨色塗牡丹唐草蒔絵御櫛台」

2013年5月21日（火）～6月23日（日）

現在紅ミュージアムでは、館蔵品「黒蝨色塗牡丹唐草蒔絵御櫛台」を公開中です。鬢水入れに櫛、眉作り、爪切、楊枝などの手近な道具類を収納していた櫛台を、常設展示とともにご覧いただけます。上記の期間限定の公開資料となりますのでお見逃しなく。



—伊勢半グループ製品の

今昔

—「キスマースーパー口紅」

紅ミュージアムでは、ただ今「紅」の調査研究・普及のほか、今日までに生み出された伊勢半グループ史料の整理を鋭意進めています。また、今年度キスマーブランドを中心とした企業史展を開催する予定です。そこで企業史展にさきがけ、整理中に見つけた注目資料をほんの少しだけ先にご紹介します。

江戸時代、紅屋として創業した伊勢半は、近代に入り女性用総合化粧品メーカーとして歩み始めた。特に口紅に対する思いは強く、「キスマー特殊口紅」「キスマープルーフ口紅」「キスマーバナシング口紅」など多色で多様なデザインの中、口紅を次々と発売した。

そんな中、昭和二十九年(一九五四)九月に発表したのが「キスマースーパー

口紅」である。スーパー口紅は、前年までに売り出された「プルーフ口紅」の後を受けて落ちにくい口紅として大ヒットした。

キャッチコピーとして使用していた「キスマーでも落ちない口紅」は、当時としてはかなりインパクトのあるコピーだった。また、広告にキスマーの外国人モデルの男女を起用し、その強烈なイメージから新聞掲載を断られたり、主婦連合会から苦情の電話が入るほどであったという。



キスマースーパー口紅  
昭和29年(1954)～ ¥200



テアトル東京「乙女の館」の映画プログラム裏表紙  
昭和32年(1957)4月

さらに、「未だ3色しかできません」というコピーも製造が容易でない高品質な製品である、というイメージを消費者に印象づけた。スーパー口紅のヒットにより伊勢半は「紅屋伊勢半」から「口紅のキスマー」として大きく飛躍し、世の女性の圧倒的な支持を得るまでに至った。

スーパー口紅は元々、昭和三〇年(一九五五)四月に発売予定であった。しかし、ライバル社が同

じく落ちない口紅を発売するらしいという情報が入り、急遽半年繰り上げて発売した。

ところで、落ちない口紅といえど、一九九〇年代前半に落ちにくい口紅が行ったことをご記憶されている方も多いただろう。そして、近年また落ちにくい口紅が話題を呼んでいる。使い古された言葉だが、まさに「流行は繰り返される」、「そんな言葉が思い浮かぶ」。

Information

かわら版

講座のご案内

■「夏休み子ども自由研究 紅ってなあに」  
～紅のおはなし・紅の作り方・  
紅を塗ってみよう・紅を食べてみよう～

講師：当館学芸員  
2013年8月2日(金)①11:00～12:30 ②15:00～16:30  
■対象学年：小学校3～4年生  
■定員：各回10名(親子2人1組で5組) ■参加費：無料  
※お問合せ・お申込みは紅ミュージアム(03-5467-3735)まで

Since 1825 伊勢半本店 紅 ミュージアム

●開館時間/11:00～19:00 ●休館日/毎週月曜日  
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>